

八四 弓歌集（抄） 夏目周輔

（表紙）

「弓歌集」（横）

（見返し）

「此本人ニ見せる事無用

劍術渋川流

（荷） 夏目正清

弓 雪何流

」

（前略）

足 踏

沓下は右をはきひひひだりをば

大ゆびつよく踏つめて射よ

踏ひらくひろきせまきの足間は

おのが矢束のほどに従がえ

足踏は百に替りのあるとぞよ

おのが身形のおのが身の曲尺

足踏はおのが肩幅一ぱいに

きびす（踵）を揃へ踏みしめて射よ

一ツある教えへの外の足踏は

おのれと立る我と知るべし

中すみのゆみの足踏わすれなば

ならい受くるも何にかわせん

弓かまへ

弓かまへ強ミちなりをそのままに

身なりひち（肘？）なり四方拾合

打見たる的をしつかと見定て

我顔通りはつし外すな

立一横一

弓手妻手横を変たるごとくにて

胴ははしらよ足はおひ木よ

肩骨の出る射人こそ矢強けれ

勝手下りて射るかたほうし

陰陽の和合と弓ハ射るなれど

押手強なる射手ハ射手なり

合弓歌集（抄）

（表紙）

「弓歌集」（横）

（見返し）

「此本人ニ見せる事無用

劍術渋川流

夏目正清

弓 雪何流

」

（前略）

足 踏

沓下は右をはきひひひたりをは

大ゆひつよく踏つめて射よ

踏ひらくひろきせまきの足間は

おのか矢束のほどにしたかへ

足踏は百に替りのあるとぞよ

おのか身形のおのか身の曲尺

足踏はおのか肩幅一はひに

一ツあるおしへの外の足踏は

おのれと立る我としるへし

中すみのゆみの足踏わすれなハ

ならひうくるも何にかわせん

弓かまへ

弓かまへ強ミちなりをそのままに

身なりひちなり四方拾合

打見たる的をしつかと見定て

我顔通りはつし外すな

立一横一

弓手妻手横を変たるごとくにて

胴ははしらよ足はおひ木よ

肩骨の出る射人こそ矢強けれ

勝手下りて射るかたほうし

陰陽の和合と弓ハ射るなれと

押手強なる射手ハ射手なり

胴つくり

胴つくり立てそのまゝその形
つくらすつめていききをつめされ
明らかき心のやどる胴ならば
躰のすぐこそこのまほしけれ

胴つくり

胴つくり立てそのままその形
つくらすつめて息をつめされ
明らかき心のやどる胴ならば
躰の直ぐこそ好まほしけれ

打発

打発は□すへはつにころして
手の内なり弦ミちをせよ
打上も我目通りを曲尺にして
押手うこかすそのまゝにひけ

打発

打発は□すへはつにころして
手の内なり弦ミちをせよ
打上も我目通りを曲尺にして
押手動かすそのままにひけ

彎(44)

引とりは高くとりつけたかく引
肘(44)をよくつめ一味上骨
能彎て引ながらへよたもたすと
はなれを弓にしらせぬそ□き(よき)
さし矢をは手前を引て矢先はり
矢のせかさりハ鞆も手の内
さのみ弓をひかんとのみ思ふなよ
つけへつけなん筋骨をはれ
彎込(44)ているのねんおこるこそ
只ひとすじの心なきゆへ

引こみ?

引とりは高くとりつけ高く引き
肘?をよくつめ一味上骨
よく引きて引ながらえよ保もたすと
はなれを弓に知らせぬぞよき
さし(指?)矢をば手前を引て矢先はり
矢のせかさりハ鞆も手の内
さのみ弓をひかんとのみ思ふなよ
つけへつけなん筋骨をは(張?)れ
引込(44)みているの念起こるこそ
ただ一筋の心無き故

物見

顔もちハやよとて人のよふ時に
射るとこたへて見むく顔もち
目当をは只ひとすじに見定て
はなつ矢さきに中らぬハなし
弓法の奥の大事ハしらねども
先中らぬを下手と云ふへし
物見とてさのミに深くおとかひを
つめて見こむハいきつきのうし
顔もちハてるもちむも外なれや
中の物見をつすれはしすな
物を見るころ形(44)かつるひて
ミきの腰膝うくものとしれ
打見たる的をしつかと見定て
我顔通りはつしはしすな
何となく見たる物見を直なるを
これぞ素直の生なるへし

物見

顔もちハやよとて人のよふ時に
射ると忘えて見むく顔もち
目当をばただ一筋に見定めて
放つ矢先に中らぬは無し
弓法の奥の大事は知らねども
先中らぬを下手というべし
物見とてさのみに深く願(願)を
つめて見込(44)むは息つきのうし
顔もちハてるもちぢむも外なれや
中の物見をつすれ外すな
物を見るころ形(44)かつるひて
幹の腰膝浮くものと知れ
打見たる的をしつかと見定めて
我顔通りはつし外すな
何となく見たる物見を直ぐなるを
これぞ素直の生なるべし

手先

いかにせん押手へぬるくなまなへて
勝手かちなる射手そかなしき
見る人の刀矢束のおとることそ
勝手のさかるゆへとしるへし
肘(ひじ)よりに射たる所は見よけれど
矢の大わさにならぬことかな
弓は只植木のごとく射さすへし
ゆがみてもすぐ直にてもすぐ

手先

いかにせん押手はぬるくなま萎えて
勝手勝ちなる射手ぞ悲しき
見る人の刀矢束の劣ることそ
勝手のさがる故と知るべし
肘よりに射たる所は見よけれど
矢の大技にならぬことかな
弓はただ植木のごとく射さすべし
ゆがみてもすぐ直にてもすぐ

放れ

はなれとは放るゝ時にはなされて
しらすしらせす是を七道
放し口大事のうへの大事なり
強ミか弓にてゆるむとぞ□
有明の射るともしらぬ心こそ
無ねん無相の放れなるへし
矢をかけて引しほる□は覚ゆとも
はなつころろへ無ねん無相に
飛やうに能あひたる弓を射る時へ
はなれ心たねんなきやう

放れ

放れとは放るる時に放されて
知らず知らせず是を七道
放し口大事の上の大事なり
強みが弓にて緩むとぞ□
有明の射るとも知らぬ心こそ
無念無想の放れなるべし
矢をかけて引き絞るとは覚ゆとも
放つ心は無念無想に
飛ぶように能あいたる弓を射るときは
放れ心他念無き様

曲尺

弓に曲尺あつる心へありながら
人によりける和歌の浦なミ
強弱は弓にあるなり手先にも
人によりてのおしへありけり
握をは矢束によりて定むへし
上り下りは人の手による

曲尺

弓に曲尺当つる心はありながら
人によりける和歌の浦なみ
強弱は弓にあるなり手先にも
人によりての教えありけり
握りをば矢束によりて定むべし
上り下りは人の手による

ひやうし

弦ひやうし弓の拍子といふ事を
しりてものふる矢のほしきさよ
弦打や弦ね弦音弦ひやうし
時によりての言葉とぞ聞
弓は只ひやうしを守ると射ぬ人
長か力すくひやうほうの人

拍子

弦拍子弓の拍子ということ
知りてものふる矢の不思議さよ
弦打ちや弦ね弦音弦拍子
時によりての言葉とぞ聞く
弓はただ拍子を守ると射ぬ人は
長か力すく兵法の人

鞞ころ

鞞かけす弓ハ握らす弓ハ射す
ゆミに射するし人そかなしき
強弓に大根を射へき手の内は
紅葉かさねにこからしのかげ

すまし

すましとて外の形をあらハすな
ころにうけぬいとこそしれ

鞞ころ 鞞シヨウハ鞞ハゆがけ

鞞かけず弓は握らず弓は射す
弓に射するし人ぞ悲しき
強弓に大根を射べき手の内は
紅葉重ねに木枯らしのかげ

すまし

すましとて外の形を表すな
心に受けぬいとこそ知れ

歌四十七

人ごとに生れつきぬるゆミかたを
只いちやうとおもふこそやうき
弓は只ならひのまゝにおしへなは
医書ばかりよむくすし成けり
長矢束うての大きか射ならば

ならひはさらにいらぬものか□^(なま)
陰陽の和合と弓ハ射るなれと

押手強なる射手か射手なり
いかにせん押手ハぬるくなまなへて
勝手かちなる射手そかなしき
見る人の力矢束のおとこそ

勝手のさかるゆへとしるへし
朝嵐初心の射手つたへなは
ひるをもすきて夕あらしなり
尻はりに射たる所も見よけれと

矢の大わさはならぬものかな
ゆミに曲尺あつる心はありながら
人によりけるわかぬ浦なミ
弦ひやうし弓のひやうしと云事を
しらでものふる矢のふしきさよ

弓は只ひやうしを専と射ぬ人は
長か刀直く兵法のひとつ
伝へな□^(なま)かてんのゆかぬ人ならば
大事はさらに大事ならぬぞ

(中略)

文政十三丑六月写也

夏目兵部悻

周輔

(湖西市白須賀 長谷八幡神社文書)

歌四十七

人毎に生まれつきぬる弓形を
ただ一樣と思うこそ憂き
弓はただ習いのままに教えなば
医書ばかり読む薬師なりけり
長矢束うての大きか射ならば

習いはさらに要らぬものかな
陰陽の和合と弓は射るなれど

押手強なる射手が射手なり
いかにせん押手はぬるくなま萎えて
勝手勝ちなる射手ぞ悲しき
見る人の力矢束のおとこそ

勝手の下がる故と知るべし
朝嵐初心の射手伝えなば
昼をも過ぎて夕嵐なり
肘張りに射たる所も見よけれど

矢の大技はならぬものかな
弓に曲尺当つる心はありながら
人によりけるわかぬ浦なミ
弦拍子弓の拍子と云うことを
知らでものふる矢の不思議さよ

弓はただ拍子を専(守る?)と射ぬ人は
長か刀直く兵法のひとつ
伝えなら合点の行かぬ人ならば
大事はさらに大事ならぬぞ

(中略)

文政十三丑六月写也

夏目兵部悻

周輔

(湖西市白須賀 長谷八幡神社文書)

二〇一四年六月 井田 晃記

右は、弓術、日置流雪荷派の要点を五・七・五・七・七の歌にまとめたものである。

これは、私の趣味の一つである先祖調べの一環で、市原市在住の親戚の先祖が水野菊間藩士ということ幕末移封前の水野沼津藩（家康の母於代の実家筋）を確認するため「静岡県史近世」を紐解く中で見つけたものである。

「日置流雪荷派」という言葉を最初に聞いたのは、学生時代指導いただいた、林範士（当時七段教士）からで、自分が初めて弓を握ったときの師匠は日置流雪荷である、ということであった。師匠とは、匝瑳市（当時八日市場市）の射学林道場の筋向いのアサヒ弓具の塚本基資さんのことであり、南大塚のアサヒ弓具工業（株）のホームページには、日置流雪荷派の第十四代当主として紹介されている。因みに十五代当主は同社社長である故小沼英治範士であり、林範士（当時七段教士）を安沢平次郎範士に紹介した方である。このことが後に安沢先生揮毫の卒業記念弓袋を産むことになる。

日置流は室町時代中期（十五世紀後半）日置弾正に始まり、時代と共に多くの諸派に分かれるが、日置流の詳細については、たとえばウェブ上ウィキペディアで「日置流」を検索し確認されたい。

日置流の現在として、雪荷派について、東海地方などに伝わる。東海地方では武士以外に庄屋・名主層にも弓術が普及し、現在でも「お祭り弓」と称して神社において祭礼と結びついた形で保存されている、と示されている。

これに関し、ウェブ上で「湖西市 奉射神事」を検索すると、田中實著「八幡諏訪神社の奉射神事と日置流雪荷派」の調査報告が確認される。 5

ここには、祭礼弓の起源、歴史的文化的背景、三河遠州地域の日置流雪荷派について詳述されるとともに市内社寺奉射行事について調査し、奉射行事の状況の一覧表の中に、前記「弓歌集」の末尾の湖西市白須賀、長谷八幡神社に係る部分では、『奉射神事は既に廃絶され、備考に、矢場は境内整地により形跡不明。廃絶時期不明。（奉納）額も処分されてない。当社宮司の先祖に日置流雪荷派免許師範あり。』の記述がある。雪荷派の側面をよく示していると云える。

二〇一四年六月二二日 井田 晃（第六回生）記

（注）

前記「弓歌集」は、「静岡県史 資料編十五 近世七」に示されたものであり、正確を期すため本文をスキヤンしたものを上段に、その江戸時代の仮名遣いに対する読み下しを下段に示したものである。

原文は古文書であり、汚れや滲みや虫食いや書き手の誤りを含んでいることが考えられる。また原文読み下しや原稿作成段階での誤りやその後の校正ミスも否定できない。

たとえば、拍子の項の「弓はただ拍子を守ると射ぬ人は」および歌四十七の項の「弓はただ拍子を専と射ぬ人は」における「守」と「専」は古文書では一見、運筆が類似していることもあり、後者の「専」は「守」ではないかと考えられる。また弓かまへの項の「我顔通りはつし外すな」の外すなが物見の項では、はしすなとなっている。このような誤り、差異について、原文の書き手が誤ったか、若しくは読み手が誤ったかは、原文を生（なま）で確認しなければ分からないといえる。

いずれにしても本稿提供者自身、古文に慣れていないこと、日置流を知らないこと、その他全般に浅学非才であることから、下段の読み下しも誠に心もとないものであると云える。

此の点を含んでのご笑覧とご指摘をお願いする次第です。

井田 晃（第六回生）